

くるい咲き

野村胡堂

—

相変らず捕物の名人の銭形平次が、大縮尻おおしくじりをやつて笹野新三郎に褒められた話。

その発端ほったんは世にも恐ろしい『晝屋殺し』でした。

「た、大変ッ」

麴町四丁目、晝屋弥助のところにいる職人の勝蔵が、裏口から調子ばずつ外れな声を出します。

「何だ、又調練場ちようれんばから小蛇こへびでも這出はいだして来たのかい」

と、その頃は贅ぜいの一つにされた、猿屋さるやの房楊枝ふさようじを横くわえにして、弥助の息

子の駒次郎が、縁側へ顔を出しました。

「それどころじゃねえ」

「町内中の騒ぎになるから、少し静かにしてくれ。麴町へ巨蟒うわぼみなんか出っこはねえ」

「今度のは巨蟒じゃねえ、丈吉の野郎が井戸で死んでいるんだ」

「何だと」

駒次郎は、はだし跣足で飛降りました。そこから木戸を押すと直ぐ釣瓶井戸で、その二間ばかり向うは、隣の屋敷と隔てた長い黒板塀になっております。

丈吉の死体は、井戸端にくみ上げた釣瓶に手を掛けて、そのまま崩折れたなりに冷たくなっていたのでした。

抱き起して見ると、右の眼へ深々と突っ立ったのは、商売物の磨き抜いたたみばり針。

「あッ」

駒次郎も驚いて手を離しました。

「ね、兄哥、丈吉の野郎が、何だつて畳針を眼に突つ立てたんでしょ」

「そんな事は解るものか。親父へそう言つてくれ」

「親方はまだ寝ていますぜ」

「そんな事に遠慮をする奴があるものか」

勝蔵が主人の弥助を起して来ると、井戸端の騒ぎは際限もなく大きくなつて行きます。

変死の届出があると、町役人が立会の上、四谷の御用聞で朱房しゅぼうの源吉という顔の良いのが、一応見に来ましたが、裏木戸やお勝手口の締りは嚴重な上、塀の上を越した跡もないので、外から曲者が入った様子は絶対にないと言う見込みでした。

それに、丈吉はなかなかの道楽者で諸方に不義理の借金もあり、年中馬鹿馬鹿しい女出入りで悩まされていたので、十人が十人、じがい自害を疑う者はありません。

「持ち合せた畳針で眼を突いて、井戸へ飛込むつもりだったんだね。ところがここまで来ると力が脱けて井戸へ飛込む勢いもなくなった——」

朱房の源吉は独り言を言いながら、もっともらしくその辺を見廻したりしました。

「親分の前だが、こいつは自害じゃありませんぜ」

不意に横合から、変な口を利く奴があります。

「何だと？」

振り返るとそこに立っているのは、銭形の平次の子分で、お馴染なじみのガラツ八、長い顔を一倍長くして、源吉の後ろから、肩へ首を載っけるように覗いている

のでした。

「ね、朱房の親分、井戸へ飛込んで死ぬ気なら、何も痛い思いをして、眼なんか突かなくなつたつて宜いでしよう」

「何？」

「それに、商売柄、縄にも庖丁ほうちやうにも不自由があるわけはねえ」

八五郎は少し調子に乘りました。さすがに死体には手は着けません、遠方から唇くちを尖らせ、平次仕込みの頭の良いところをチョッピリ聴かせます。

「手前は何だ」

「へエ——」

「どこから潜もぐつて来やがった」

源吉の調子は圧倒的でした。

「神田の平次親分のところにいる八五郎で、へエ——」

「ガラツ八は名乗らなくたって解っているよ、その長い顎が物を言わア、看板に偽りのねえ面だ」

「へエ——」

「俺が訊くのは、どこから何の用事で来たか——てんだよ。ここへそんな顎を突っ込むのは縄張り違いえだろう」

「朱房の親分、決してそんな訳じゃありません。平川天神様へ朝詣りをして、三丁目へ通りかかると町内中の噂だ。知らん振りもなるまいと思うから、ちょいと顔を出したまでで」

「面だけで沢山だ。口なんか出して貰いたくねえ」

「相済みませんが、親分、どう見たってこれは自害じゃありません。自分の手で、眼玉へ畳針を三寸も打ち込めるもんじゃありませんぜ」

ガラツ八も容易に引下がりません。

「目玉へ畳針を当てて、井戸端へ頭を叩きつけたらどうだ」

「それなら井戸端へ血がつく筈じゃありませんか」

「血なんか幾らも出ちゃいないよ」

「もう一度調べ直して下さい。外から曲者が入ったんでなきやア、家の中の者でしょう。その男は金廻りも悪いが、女癖おんなくせが悪かったって言いますから」

「さア、もう帰って貰おうか、ガラッ八親分なんざ、物を言うだけ恥かを搔かくぜ、——昨夜はあの良い月だ。井戸端で立ち廻りをやるのを、家の者が知らずにいる筈もなし、第一、人間の眼は八五郎兄哥の前だが、どこかの岡っ引よりは、余すばしこつ程敏捷いぜ。畳針を突っ立てられるまで、開けっ放しになっっちゃいねえ、瞬またたきをするとか、顔を反けるとか、何とかするよ」

「——」

「畳針は真っ直ぐに突っ立っているし、頬にも脛にも傷はねえ」

源吉はしたり顔でした。死体になった丈吉は、衣紋えもんの崩れもなく、瞳へ真つ直ぐに立った畳針を見ると、争いがあったとは思ひも寄らなかつたのです。

「——」
ガラツ八はぐくりと固唾かたずを吞みました。丈吉が氣でも違つていない限り、丈夫な縄も、鋭利な庖丁も捨てて、一番無氣味な、一番不確実な、畳針で死ぬ氣になつた心持が吞込めなかつたのです。

「神田の八五郎兄哥は、この家の中に下手人がいる見込みだとよ、皆んな顔を並べて、人相でも見せてやんな、——自棄やけに良い男が揃つているじゃないか。

女出入りなら駒次郎兄哥などが早速やられる口だぜ。金が欲しきやア、弥助親方だ、——何だつて又選りに選つて、醜男ぶおとこで空つ尻で、取柄も意氣地もねえ丈吉などの眼玉を覗つたんだ」

くるい咲き

朱房の源吉は、井戸端に集まつた多勢の顔を見渡しながら、いい心持そうに

こんな事を言いました。

主人の弥助は五十を越した年配、その伴せがれ、駒次郎は取つて二十三、これは山ノ手の娘に大騒ぎされている男前、職人の勝蔵も、二十五六の苦み走つた男、源吉が言うのは、満更出鱈目でたらめではなかつたのです。

「やい、八兄哥、帰つたら平次へそう言いな、近頃少し評判がいいようだが、あんまり出しや張るとろくな事になるめえ——とな」

シヨンボリ帰つて行くガラツ八の後姿へ、源吉は思う存分の悪罵あくばを浴びせました。平次には余つ程怨みがある様子です。

二

くるい咲き

「親分、こういうわけだ、あつしは何と言われたつて構わねえが、親分の事ま

であんなに言われちゃ我慢がならねえ。お願いだから四丁目まで行ってやっておくんなさい。源吉の鼻をあかさなきゃア、この稼業は今日限り止しだ。足を洗って紙屑拾いでも何でもやりますよ」

ガラッ八の折入った様子は、世にも不思議な痛々しさでした。浴衣の尻を端折って、朝顔の鉢の世話を焼いていた平次も、思わず真剣な顔を挙げます。

「大層腹を立てたんだな八、手前にも似わない」

「腹も立てますよ、親分」

「まあ宜い、俺にまで喰ってかかられちゃ叶かなわない、ちよつと行って見るだけでも、見てやろうか」

と平次。

「親分、本当に行つて下さるか」

「八の顔だつて汚しつ放しにはなるめえ、それに、話の様子じゃ、俺が考えて

も自害じゃねえ」

「有難てえ、それでこそ銭形の親分だ」

「馬鹿野郎、おだてに乗って出かけるわけじゃねえぞ」

「へッ、へッ」

ガラツ八は自分の額をピシヤピシヤ叩いておりました。この心服しきつてい
る親分から『馬鹿野郎』と叱られる度たびに、嬉しくて嬉しくてたまらない様子で
す。

四丁目の畳屋へ行ったのは、巳刻よつ少し過ぎ、朱房の源吉は引揚げましたが、
幸い丈吉の死体は、筵むしろを掛けたまま、まだそのままにしてありました。

「フーム」

度さかを除とって一目、平次は呻うなりました。忙しく四方あたりの様子を見廻して、もう一
度ガラツ八の顔かえに還かえった瞳には、『——よく疑った——』と言うような色がチラ

リと見えるのでした。

「ね、親分、誰かに殺されたに違いないでしょう」

少しばかりガラツ八の鼻は蠢めきます。

「そんな事が解るものか——これだけ力任せに置針を刺すうち、凝つとしてい
るのは可笑しいな」

「眠っているところをやられたら？」

ガラツ八、今度は少し不安になりました。

「井戸端で眼を開いて寝ている奴はない」

「酔よっぱら払っていたらどうです」

とガラツ八。

「丈吉は生れつきの下戸で、樽柿たるがきを食っても赤くなる野郎でしたよ」

主人の弥助は後ろから口を出しました。折角朱房の源吉が自害として運んで

いるのを、変な場違い野郎が飛出して、『殺し』にしようという態度が、癩しやくにさわってたまらなかつたのです。

「親分、向うの二階から手裏剣を飛ばしたらどんなものでしょう」

ガラツ八はそつと囁きます。畳屋の裏は黒板塀を隔てて、しもたやが二軒、一軒は平屋の女世帯、一軒は裕福な浪人者の住居、こちらの方には、小さい二階があつたのです。

「少し遠いな、——それに、畳針は手裏剣には少し軽いからあの二階から打つたんでは、頬に傷をつける位が精々だ。眼玉を狙って三寸も打ち込むわけには行くまい」

「——」

ガラツ八は黙ってしまいました。折角神田から引張り出してきた親分の平次も、これでは源吉とたいした変りはありません。弥助も、その倅の駒次郎も、

職人の勝蔵も口には出しませんが——好い気味だ——と言った顔で、ガラッ八の照れ臭い様子を眺めております。

「お隣りはどんな人が住んでいなさるんで？」

平次は改めて弥助に訊きました。

「右の方は下町の物持のお嬢さんが一人、何でも妾腹しやうぶくで御本宅がやかましいとかで、下女が二人ついて暢気のんきに暮していますよ、お名前はお町さん——」

「左の方は」

「御浪人ですが、これは大藩の御留守居をなすった方で、お金がうんとあります。町内の質屋もとでに資本を廻して、お子様と二人暮し、——お子様と言ったところで、もう二十歳はたち近いお嬢さんで、これはお綺麗な方です」

弥助は揉手をしながら、自分のことのようにニコニコしております。余程浪人と懇意こんいにしている様子です。

「お年は？」

「厄やく少し過ぎでしようか、御名前は大里玄十郎様、立派な方で御座います」

三

平次は一応現場を調べた上、町内の質屋へ行って見ました。

大里玄十郎の暮し向きの事を訊くと置屋の主人が言ったのは、まるっ切り大嘘うそ、質屋へ資本もとでを廻しているどころか、その日の物には困らないまでも、暮しが贅沢なのと、娘のお才が派手好みなので、内々、腰の物までも曲げることがあると言う話――

「近頃置屋とすっかり昵懇じっこんになったようですから、いずれあの娘を、駒次郎へ押しつけるつもりでしょう。この節の武家は、そんな事を何んとも思っちゃおくるい咲き

りませんよ。——それにあの畳屋は一丁目から御見附まで、表通りには、及ぶ者もない物持ですからね」

そつと、こんな立ち入ったことまで教えてくれました。

平次はその足で直ぐ大里玄十郎の格子の外に立ちました。

「何？ 銭形の平次が参った、丁度宜い塩梅だ、こつちにも言いたいことがある」

一刀を提^{ひっさ}げて、上^{かまち}り框にヌツと突つ立^たつたのは、青髯^{あおひげ}の跡^{あと}凄まじい中年の浪人です。

「恐れ入りますが、一寸お嬢様に御目に掛りとう御座いますが」
慇懃^{いんぎん}な平次を尻目に見て、

「馬鹿奴^{しゅりけん}ツ、手先御用聞に口をきくような娘は持たぬぞ——この家の二階から手裏剣を打^うつて丈吉を殺した——などと云つた奴があるそうだが、飛んでもな

い野郎だ。十間以上離れたところから畳針を飛ばして、人の命をとるほどの腕があれば、浪人などはしていないぞ」

「恐れ入ります」

「恐れ入ったら帰れ帰れ、畳屋の職人を殺すほど怨も理由もある拙者ではない。この上用事があるなら、せめて町方の役人を伴れて来い、馬鹿馬鹿しい」

いやもう滅茶滅茶です。

「飛んだお邪魔をいたしました、御免」

平次とガラツ八は、キリキリ舞いをして引き下がりました。何心なく振り返ると、袖垣の上から一と目に見える縁側に、二十歳ばかりの武家風とも町家風ともつかぬ娘が立って、二人の後ろ姿を見送っているのと、顔を見合せてしまいました。

くるい咲き

背の高い、少し骨張った娘ですが、何となく艶めかしい十人並に優れた美し

さです。

「親分、済まねえ、手裏剣は間違いだったネ」

追いつがるようにガラッ八。

「最初^{はな}っから俺はそんな事を考えちゃいねえよ」

「じゃ矢張り自分の眼へ針を刺して井戸端へ頭をぶつつけたんで」

とガラッ八。

「そんな事が出来る芸当かどうか、やってみな」

「へッ」

そんな事を言いながら、二人はもう一軒の隣、お町という娘の住んでいる家の格子の外に立っておりまして。

「お町さんはいなさるか。神田の平次だが、ちよいと逢って下さい」

「へエ——」

年頃の下女は奥へ飛んで行きました。隣りに騒ぎのあつたことは知っている筈ですから、神田の平次という言葉がピンと来たのでしよう。

暫くすると、

「あの、済みませんが、お嬢さんは寝やすんでおります、え、お風邪かぜで御座います。どんな御用でしよう？」

先刻の下女が物に怯おびえたように、畳の上へ手を突いているのでした。

「風邪？ それはいけないな、夏の風邪は抜け難いから、用心なさるがいい、何時から寝なすつたんだ」

平次の調子は至って平坦でした。

「昨夜宵のうちからお加減が悪そうでしたが、今朝はもう起きていらつしやい
ません」

「そうかい」

「あの、御用は？」

「なアに、たいした事ではないが、——隣りの畳屋の職人が死んだのをお聞きなすつたろう」

「へエ」

「あれは、人に殺されたんだと思うんだ。心当りはあるまいね」

「いえ、何にも」

「あの丈吉とか言う男は、時々ここへ来ることがあつたかい」

「一度もいらつしやいません。私などはお顔もろくに知らない位で——」

「駒次郎兄哥は時々来るだろうね」

「へエ——」

そう言つて下女はハツと袖口で口を覆おおいましたが続けて、

「でも、でもあの、近頃はさっぱりいらつしやいません」

「そうだろう、大里様のお才さんと近いうちに祝言するそうだから」

「――」
妙に探り合いのような、くすぐ擦った空気です。

「お嬢さんにはお目に掛るまでもないんだが、その代りあの塀のあたりを見せ
て貰いたいよ、丈吉殺しの曲者が、あの辺から塀を越して行ったかも知れない
んでネ」

「――」
下女が返事をする前に、ガラツ八を目でさしま磨ねいた平次は、畳屋との境になっ
ている黒板塀の方へ近づきました。

南を塞がれているので、草花の育ちそうもない塀の下は、ジメジメした苔こけの
上に、女下駄の跡だけが幾つかほのかに読めます。

「親分、男なんざ入った様子はありませんね。それにこの塀と来た日にや、ま

さか人間は潜られないが、バツタ、カマキリ、蝶々、蜻蛉とんぼは潜り放題だ」

全くその通りでした。畳屋の方こそ、黒々と塗って、たいした不体裁もありませんが、こつちの方は見る蔭もなく荒れて、支えの柱は所々歪ゆがんだまま、曝ひられきった板は、灰色に腐蝕ふしょくして、所々に節穴さえ開いております。

平次とガラッ八が塀際を離れて元の格子戸の前へ来ると、青い顔をした娘が少し取り乱した姿で目礼をしております。

「お町さんでしょうね、飛んだお邪魔をしました」

「どういたしまして」

「気分はどうです」

平次は格子の中へ入って、言葉はひどく丁寧ですが、いつもに似ぬ凶々しい態度で上がり框かまちに腰を下ろしました。

「有難う御座います、大したことは御座いません」

何という痛々しい感じのする娘でしょう。白粉つ気のない初々しさも充分に美しいのですが、可哀想に眉から左の耳へかけて火の燃えるような、赤痣あかあざです。

「そんな事で変な気を起しちゃならねえ」

平次はつかぬ事を言つて、この娘の宿命的な醜みにくい半面を見詰めました。右半面がお才などは足許にも寄りつけぬほど美しいのに、これは又、何という造化の悪戯でしょう。血と肉で出来た大傑作だいけつさくへ何か気に染まぬ事があつて、赤い絵の具皿を叩きつけたと言つた顔です。

「ところで、女世帯では何かと物騒だろう。隣の畳屋を見張らせながら、ごく要心の良い男を一人置いて行くが、泊めて下さるでしょうね」

「えッ」

「八、手前てまえ今晚から、当分ここに泊っているんだよ、用心棒に」

「親分、あつしが？」

「そうよ、若い女の中へ転がして置くには、手前のような用心の好い男は滅多めったにねえ」

「チエツ、情けねえことになりやがったな」

「頼んだよ、八」

平次はろくに返事も聴かず、そのまま神田へ引揚げました。

「弱ったなア、どうも、驚いたなア」

後に残された八五郎の弱りようと言うものはありません。

若い女二人の白い眼に射竦いすくめられて、何時までもじもじしていることでしょう。

四

「親分、大変な事になつたぜ」

「又大変かい、八の大変に驚いていた日にや、御用聞が勤まらねえ」
平次は縁側で相変らず朝顔の世話に余念もありません。

「立派な御用聞が朝顔道楽あさがおどろらくを始めるようじゃ——」

「何だと、八」

「へッ、へッ、天下は泰平だつて話で」

「馬鹿にしちやいけねえ、——ところでその大変というのは何だ」

「また一人死にましたぜ」

「何？ 到頭お町が死んだのか」

平次は朝顔を投げ出すように立ち上がりました。

「お町——とどうして解るんで」

ガラツ八の鼻はキナ臭く蠢めきます。

「俺はそれが危いと思つたからお前を泊めたんだ、何だつて夜っぴて見張つていねえ」

「それは無理だよ親分、そう言つてくれさえすりゃア、あの娘の首つ玉へでも噛りついていたのに、あつしは外から来る野郎ばかり見張つていたんだ」

ガラツ八は叱られながら甚だ不服そうです。

「とにかく行つて見よう、もうこれつきりだろうと思うが、一応見て置かないと、後々のことが安心ならねえ」

二人は直ぐさま飛出しました。

麴町四丁目の、お町の家へ行つて見ると、隣の畳屋の井戸から引揚げて来たばかりのお町の死体は、乾いた物に着換えさせて、二人の下女と、それから、日本橋から駆けつけたという、お町の姉というのが、線香を焚いたり、鉦かねを叩いたり、泣き濡れて拜んでばかりおりました。

「畳屋の井戸へ飛込んだのかい、成程こっちの方が少し深い」

平次は今更そんな事まで感心しております。

「銭形の、御苦労だね」

畳屋からノソリと出て来たのは朱房しゆぶさの源吉、朝つからアルコールが胃囊いぶくろへ入ったらしく、赤い顔と据った眼が、何となく挑戦的です。

「朱房の兄哥、八五郎の奴が飛んだお節介をして済まなかつたねえ、勘弁してくんな」

平次は微笑をさえ浮かべて、蟠わたかまりのない調子でこう言いました。

「なアに、自害が自害と解りさえすりゃアそれでいいのさ。人殺しの下手人が解らなかつたとなると、この辺を縄張かかにしている、この源吉の顔に拘かかわると言うものだ、——なア八兄哥、今度はお町は井戸へ投げ込まれたに違ちがえねえな
んて言わないことだぜ」

「そんな事を言やしません」

八五郎は盆の窪くぼのあたりを搔かいております。

「丈吉とお町は言い交した仲さ、——丈吉が借金だらけで自害したんで、お町がその後を追うつもりで、わざわざこの井戸までやって来て身を投げた——とね、本阿弥ほんあみが夫婦づれで来ても、この鑑定かんていに間違いはあるめえ」

朱房の源吉は本当にしたり顔でした。

お町の家へ引返して来ると、姉のお勢はすっかり心を取り直したもののか、薄化粧までして平次とガラッ八を迎えました。

二十七八——どうかしたらもう少し若いでしょうが、とにかく、素晴らしい肉体を持った女で、その妖艶ようえんな美しさは興奮した後だけに、却って眼の覚めるようです。若い雌鹿めじかのように均勢の取れた四肢てあし、骨細のくせに、よく脂あぶらの乗った皮膚の光沢つやなどは、桃色真珠しんじゆを見るようで、側へ寄っただけで、一種異様な

香気を発散して、誰でも酔わせずには措かないと言った、不思議な種類の女だったのです。

「お、人形町の師匠じゃないか」

「あら、銭形の親分」

取繕とりつくろったところを見ると、紛れもありませぬ。それは人形町で踊りの師匠をしている、有名過ぎるほど有名な女だったのです。

「お町さんの姉というのは、師匠だったのかい」

「え、あの娘こも本当に可哀想な事をしました。思い詰めた事があつたら、それと私に相談してくれればいいものを」

お勢は新しく湧いて来る涙をどうすることも出来ずに、身を捻ひねって、袖口を顔に押当てました。痛ましくも顫ふるえる肩のあたり、何と云う艶めかしくも美しい悲しみの姿態ポーズでしょう。

「気の毒だったネ、そんな事もありはしないかと思つて、八五郎を側へつけて置いたんだが——」

「そうですね、本当に親分さんの思いやりは、どんなに有難いと思つたか——でも、死ぬ氣になつた者は、どんな隙すきでも見つけます。八さんのせいにしちやお氣の毒じゃ御座いませんか」

「まアまア、あんまり泣くのも妹さんのために良いことじゃあるまい、諦あきらめろと言つては薄情だが」

「有難う御座います、親分さん」

平次はいい加減にして神田へ引揚げました。事件はこれで何もかも大団円になつたようですが、平次の心の中にはまだまだまだ済まない事ばかりです。

「八、気の毒だが、これから三日に一度位ずつ四丁目へ行つて見てくれ」

「四丁目？」

「麹町四丁目だよ。畳屋と大里とかいう浪人の家と、それからお町の家へ当分姉のお勢が住む事になったそうだから、序ついでにそれも見廻るんだ」

「まだあの辺に何かあるんですかい、親分」

「これから本当の芝居が始まるだろうよ、見ているがいい」

平次は、何やら呑込み顔にうなずきます。

五

それから十五六日、平次は外の大きな事件に首を突っ込んで、早出おそがえの遅帰りおそがえを続けたために、ガラッ八に逢う機会もありませんでした。

「親分、驚いたぜ、全く」

ガラッ八は到頭平次を捕まえました。

平手で長い顎から頬を撫でて、恐ろしく擦った顔をして見せるのです。

「何に驚いたんだ、——また四丁目で誰か死んだのかい」

「そこまでは行かねえ、が、あのお勢がどうかしたんだ」

「——」

「妹の家へ入り込んだは宜いが、近頃は恐ろしく若造りで妹の三十五日も済まない内から、町内の若い者を集めて、浮れきっているんだ」

「フーム」

「日髪日化粧で、どう見たって二十二三だ。大変な化物だぜ、あの女は」

「それがどうしたんだ、お前が口説くどかれでもしたと言うのか」

「へッ、口説きもどうもしねえが、あんまり色っぽいんで、気味が悪くて、長居は出来ねえ」

「大層気が弱いじゃないか」

「騙だまされると思つて、親分も一度行つて見なさるが宜い、請合うけあい二三日はボーツとするから」

「それは面白かろう、見ぬは末代まつだいの恥だ、直ぐ行くとしようか」

「お静さんが氣を悪くしなきやア宜いが」

「何をつまらねえ」

二人はもう日が暮れたというのに、麴町四丁目までやつて行きました。

「お勢さん、親分を伴れて来たぜ」

案内役のガラツ八は、顎あごから手を外して、格子を開けます。

「あら親分、その後はすっかり御見限りねえ、でもまアよく」

といった調子、荒い浴衣の袖を翻かえして、ニッコリすると、その辺へんじゅう桃色の媚こびが撒き散らされて、何もかも匂いそうです。

「これは驚いた」

「あら、何を驚いてらっしやるの親分、丁度淋しがつているところよ、ゆっくりなすつても宜いでしよう」

手を取っていきなり奥へ。

人形町にいる時は、色白の素顔を自慢したお勢、どう踏んでも三十がらみに見えた大年増でしたが、厚化粧にささべに笹紅の極彩色をして、精一杯の媚と、踊りで鍛きたえた若々しい身のこなしを見ると、二十二三より上ではありません。

どつちが本当のお勢なのか、こうなると平次も見当がつかなくなる位。

「驚いたね、どうも、お勢さんがそんなに若いとは思わなかったよ」

照れ隠しに煙草ばかりくゆ燻らしております。

それから酒。

十重二十重に投げかける妖しの網を切り破るように、平次が神田へ帰って来たのは、もう夜中過ぎでした。

それからは平次の意気込みも違い、ガラツ八の報告も急に活気づきました。

畳屋の勝蔵がせつせとお隣りへ通い始めた、と言う報告があつてから十日ばかり経つと、今度は畳屋の息子の駒次郎が急にお勢に熱くなり出して、町内の狼連も、おおかみれん 好い男の勝蔵も、少し顔負けがしていると云つて来ました。

お勢の妖しい魅力は、みりよく 間もなく麴町中の若い者を気違いにするのではあるまいかと思ふようでした。

猛烈な達引と鞆当さやあての中に、駒次郎が次第に頭を上げ、町内の若い衆も、勝蔵も排斥して、お勢の愛を一人占めにして行く様子でした。

油のように行渡る年増の愛情は、駒次郎をすっかり夢中にさして、もう大里玄十郎の娘お才などの事を考へている余裕もなくなつてしまつた様子です。

「何かきつと起りますぜ」

ガラツ八がそう云つて、額を叩いたり、手を揉んだりしたのは、お町が死ん

で四十日目あたりのことです。

六

「いよいよ大変だ、親分」

ガラツ八が飛込んで来たのは、もう日射しの秋らしくなって、縁側の朝顔も朝々の美しい装よそおいが衰えかけた時分の事でした。

「又大変か、今度は誰の番だ」

「畳屋の駒次郎が殺やられましたぜ」

「今度は自害じゃあるまい」

「畳庖丁で、首を右から後ろへ半分も切るなんてことは、朱房の親分が見たつて自害にはならねえ」

「よしッ、行つて見よう」

平次は直ぐ飛んで行きましました。

畳屋の裏木戸を入れて、群むらがる弥次馬を掻き分けるように井戸端へ近づくと、井戸と物置の間の朝顔の垣根の中に、畳屋の息子の駒次郎が、紅あけに染んで倒れているのでした。

「銭形の兄哥、御苦労だね」

「おや朱房の兄哥」

「下手人は拳げしゅにんつたよ」

「へエ——」

「職人の勝蔵さ、隣りへ引越して来た踊りの師匠を張り合つて、主人あるじの息子を殺ばらしたんだ」

源吉は大分好い心持そうです。

「本人は口を割ったろうか」

「知らぬ存ぜぬだ、いずれは少し痛めなきやアなるまい」

「証拠は？」

「何んにもねえ——と言いたいところだが、あり過ぎて困っているんだ。刃物は勝蔵の使っている畳庖丁だ、——もつとも本人は井戸端へ忘れて置いたっていうが、良い職人が道具を井戸端へ忘れる筈はねえ、それに、昨夜駒次郎が外へ出たがるのを、ひどく気にしていたそうだ」

源吉のいう証拠はあまりに通り一遍のものです。

「駒次郎を怨む者は、まだ外にもある筈だ。怨みだけで言えば、町内の若い者が半分ほどは下手人の疑いがある。それから、大きい声じゃいえないが、娘を捨てられて怒っている浪人者もいるぜ」

「大里玄十郎か」

「まあね」

「そんな事を言つたつて、勝蔵が下手人でないとは決らないぜ、俺はともかく八丁堀へ行つて来る。町内の若い者なり、浪人なりを縛るしばがよかろうよ」

朱房の源吉は、いや、味を言いなから行つてしまいました。

町内の若い者、半分は下手人の疑い——と聞いて怯おびえたのか、路地を埋めた弥次馬は、一人去り二人帰り、間もなく大分消えてしまいます。

「親分、本当に勝蔵じゃありませんか」

ガラツ八は少し心配そうです。

「解らないよ、だがね、八、駒次郎の傷は、喉笛のどぶえの右側から始まつて、たいして深くはないが、首を半分切り落すほど後ろへ長々と引いているぜ、正面から向つた相手がこんな芸当が出来るかしら」

「斬つて下さいと首を突出したようだ——つて親分は言うんでしよう」

「その通りだよ」

「背後うしろから切ったとしたら」

「抱きついて念入りに刃物を引かなきゃア、こうは斬れない」

平次の言うことは大分變つておりました。

「じゃ親分、どういうことになるんで」

「まだ何にも解っちゃいないが、置庖丁のような短い物で、これだけ念入りに斬ると、下手人はうんと血を浴びたことだろうな」

「――」

「勝蔵の持物を皆んな見せて貰ってくれ、血のついたものが一つでもあれば下手人だ」

「へエ――」

ガラツ八は飛んで行きましたが、間もなくつままれたような顔をして帰って

来ました。

「血なんかついた物は一つもありません」

「ゆかした床下や天井裏や押入れには」

「待って下さい」

ガラッ八はもう一度飛んで行きましたが、どこにも怪しい物は見つかりませ
ん。

「なきやア宜い。住込みの職人が、着物を一と揃そろいなくして、人に気づかれな
い筈はない。やはり勝蔵じゃなかったんだらう、——念の為に水を一と釣つるべく瓶汲ん
でみる——井戸へ沈めた様子もないだらう」

「——」

「ところで八、俺は近頃朝顔を咲かせて楽しんでるが、自分で育てると、草
花も、我が子のように可愛いものだ」

「平次が人殺しの現場で、いきなり朝顔の話をはじめたので、ガラッ八も呆あっけ気に取られております。」

「草花を可愛がる心持は、又格別だよ。自分で育てないのでも、折れたり、散らされたりすると、我慢が出来ない」

「駒次郎を殺した下手人は、朝顔の垣のを除けて大廻りして逃げている。こんな優しい人殺しは珍らしかろう」

「荒っぽい男や、浪人者の仕業じゃねえ」

「八、俺はもう下手人探しが厭になったよ。こんな時は熱いお茶でも飲んで、

休むんだね」

平次はそんな事を言いながら、へいどなり堀隣のお勢の家へ引き揚げました。

七

「まア、親分」

「お勢、これはどうした」

家の中はガランとして、下女の姿も見えない上、昨日までは、あんなに厚化粧の若作りだったお勢が、白粉も紅も洗い落して、元の素顔に、無造作なくしまき櫛巻、男物のような地味な単衣を着ていたのでした。

「引越しですよ、私はやはり人形町の方が水に合いそうで——」

「それも宜かろう、——ところで、俺もつくづく岡っ引が厭になったよ」

「まア」

「気の毒だがお茶でも貰おうか」

平次は庭から縁側へ廻って、あおぎり青桐の葉影の落ちるあたりへ腰を下ろすと、お勢はいそいそと立って渋茶を一杯、それにまめらくがん豆落雁を少しばかり添えて出しました。

「お勢、今日一日俺は岡っ引じゃねえ、お前の昔馴染むかしなじみ——まア、兄貴か友達と
思つて話してくれ」

「——」

平次の言葉は急にしんみりしました。

「俺は、口幅つたいようだが、この間からの不思議な事の経緯いきさつを、何もかも知つて
いるつもりだ。最初から話してみよう、——もし違つたところがあるならそ
う言つてくれ」

「お勢は首をうなだれました。白粉つ気がないとやはり元の三十前後の大年増ですが、その物淋しい美しさは、極彩色ごくさいしきのお勢よりは却って清らかで魅力的であります。」

「駒次郎は、お前の妹のお町と言ひ交していた。かなり深い仲だったに相違ない、毎晩合図をしては、あの塀へいを挟んで両方から話したり、笑ったり、泣いたりしていたんだ——それが、大里玄十郎父娘が引越して来ると、駒次郎の心は急にお才の方へ傾かたむいてしまった。父親の弥助も、武家の娘を畳屋の嫁にするつもりですっかり夢中になって、あの大里玄十郎おおほらふきが大法螺吹の山師だとは気がつかなかつたんだ」

「お町は毎晩合図をしたが、駒次郎はもう塀の側へ来てはくれなかつた。で、

到頭我慢がし切れなくなつて、切れてやるから、たった一度だけ逢つてくれ——と言つてやつた」

「その手紙を見付けたのは丈吉だ。お町に気があつたから、駒次郎のふりをして塀の向う側へやつて来て、駒次郎がするようになり、塀の穴へ眼を当てて見た。

お町はその時駒次郎を殺して、自分も死ぬ氣だつたんだ、いつぞや駒次郎が自分の家へ忘れて行つたたみばり畳針を持ち出して塀のこつちから、一思いに眼を突いた」

「——」

「丈吉は声を立てたかも知れないが、何分の深傷ふかでで、井戸端へ行くのが精々だつた。釣瓶つるべの水で眼を冷そうとしたが、急に力が抜けて井戸端に突つ伏して死んでしまつた。眼を洗わなかつた証拠には丈吉の右の眼には少しばかり墨がついていた、たったそれだけの事で俺は何もかも見破つたような氣がした」

「何という明智でしょう。平次の言葉は、見て来たようにはつきりしておりません。」

「俺は大方察したが、お町が殺したという証拠しょうこは一つもない、それに、男に捨てられたお町の心持がいじらしかった——万一自害するような事があってはならぬと思ひ、それとなく戒いましめた上、八五郎をつけて置いたが、やはりその晩身投げをしてしまった。可哀想だが、俺には救いようがなかつたのだよ」

「それから、お前が出て来た。妹の敵を討つつもりで、本心にもない厚化粧に浮身うきみをやつし、町内の若い者を集めて、駒次郎の気を引いた、——浮気な駒次郎はお才を振り捨ててお前のところへ来たが、女郎蜘蛛じょうろうぐもの網に掛つた虫のように、どうすることも出来なくなつたのだ」

「物置の前で逢引をした晩、井戸端に勝蔵が忘れて行った庖丁を見ると、お前は急に駒次郎を殺す気になった。抱きついて来るのを、自由にされるような振りをして、背後から庖丁の手を廻して、喉から後ろへ存分に斬った」

「朝顔の垣を踏み倒すのが可哀想になって、お前は廻り道してここへ逃げ帰り、血だらけになった着物を始末し、白粉も紅も洗い落して、元のお勢になった」

「どうだ、違ったところがあるか」

平次の話は微びに入り細うがを穿ちました。語りおわって顔を挙げると、お勢は三鉢四鉢大輪の朝顔を並べた縁に突っ伏して、正体もなく泣いていたのでした。

「親分、一々その通り、寸分の違いありません。さア、私を縛って下さい」



「いや、縛るとはまだ言わない筈だ」

「けれど、これだけは御存じなかったでしょう。お町は私の娘——天にも地にも、たった一人の生みの娘だったんです」

「え、お前の娘、——年が近過ぎるようだが」

「近いもんですか、お町は十八、私は三十四」

「三十四？」

「日本橋の大店おおだなの若旦那との間に、——私が十六の時生んだ娘でした。お店に置くのが面倒で、月々仕送って頂いてここに置きました。私の側へ置くと、筋おおかみたちの悪い狼達が集まって来て、ろくな事を教えないだろうと思ったのが却って間もと違いの基もとだったのです」

「それは——」

「娘のお町が死んだ時、私も死んでしまいたいと思いましたが、身仕舞して鏡

を見ると、まだまだ私には若さも綺麗さも残つていそうに思つたので、一と芝居打つて見る気になりました。武家育ちの張子細工はりこのような娘に負けようとは思いません」

「――」

「私は勝ちました。土壇場どたんばですつぽかして、駒次郎に首でも縊くらせようと思つたのが、あんまり執拗しつこく絡からみつかれて、ツイ庖丁を振り上げてしまいました。私は娘を騙した男に、どんな事があつても身は任されません」

お勢はもう泣いてはいませんでした。真つ直ぐに目を起すと、観念し切つた殉教者じゆんきやうしやのような清らかさが、その蒼白い顔を神々しくさえ見せるのでした。

「お勢、俺は今日一日岡っ引じゃないと言つた筈だ。――駒次郎は鎌鼬かまたちにやられて死んだんだよ。放つて置けば証拠がないから、誰も気がつく筈はない、勝蔵は笹野の旦那にお願いして、縄を解いて貰う手もある」

「親分」

「解ったかお勢。——人を殺したのは悪いが、俺には縛る力はない、——せめて死んだ人達の後生を吊とむらつてやれ。解ったか」

「ハイ」

お勢も、側で聞く八五郎も、すっかり泣き濡れて、暫らくは顔も挙げませんでした。

×

×

お勢はその後踊りの師匠を廃よして、お町を葬ほうむった寺の花屋の株を買い取りました。美しく清らかな花屋のおかみが暫くの間江戸の評判だった事は言うまでもありません。

(編注)

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵—萩 柚月

初出—「オール讀物」昭和九年七月号 文藝春秋社

底本—「錢形平次捕物全集」第二卷 河出書房 昭和三十一年五月三十一日初版

編集・発行 銭形倶楽部

くるい咲き



錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>